

# 教育研究業績書

2018年11月08日

所属：看護学科

資格：助教

氏名：田丸 朋子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学, 人間工学	看護技術, 看護職の腰痛予防
学位	最終学歴
博士(看護学)	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 担任学生への国家試験勉強フォロー	2015年4月1日から2016年3月31日	担任学生が国家試験勉強をしたり模擬試験を受験したりするに当たり、進捗状況を確認したり、勉強方法を指導したりし、合格に向けてのサポートをした。
2. 学生の看護技術の自己学習への対応	2012年9月～現在	学生が基礎看護技術の自己学習を行う際に、技術の習熟度の確認や、質問への対応を随時行い、学習を深められるようにした。
3. リメディアル教育における試験問題作成	2012年9月～2014年3月	新一年生が大学の授業をスムーズに理解できるよう、高校の知識を整理するリメディアル教育において、「看護学に必要な化学」に関する小テスト問題を作成した。
4. 担任学生への学生生活支援	2012年4月1日から2015年3月31日	担任として、担当学生の学習や学校生活の支援を行った。 具体的には、履修登録後の確認、半期に一度の定期面談、必要時実施した個別面談、担任学生同士の学年を超えた交流会の開催などである。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
1. 包帯法に関する演習資料	2018年10月	包帯法の演習のための資料。包帯の目的・概要・材料の講義に加え、巻軸包帯での前腕部保護と三角巾での提肘の方法についての演習資料を作成した。他、三角巾の様々な応用方法についても記載した。
2. EBN演習で使用する資料	2016年10月1日	基礎看護技術演習のなかのEBN演習に関する説明資料、演習要領、講義用パワーポイントなどを作成した。EBN演習は本学看護学部にて特徴的な授業であり、学生が持つ看護技術に対する疑問を学生自身が探求して答えを見つける演習である。作成した資料は、演習の概要説明、演習における学生の指導要領、発表会の運営要領等である。
3. 移動・移送の援助に関する講義・演習資料	2015年10月	基礎看護技術Ⅰの科目で使用する講義資料および演習資料を作成した。この項目は、私の研究テーマである「看護師の腰痛」と密接な関係があることから、研究データや近年のインシデントの動向などをあわせ、腰痛を予防しながら患者の安全を守る方法などについて理解できる資料を作成した。
4. ベッドメイキングに関する演習資料	2014年9月	基礎看護技術Ⅰの科目で使用する演習資料を作成した。この項目は、1年生の後期で基礎看護技術の演習を受け始める、初めての演習に当たる。そのため、演習そのものについてこのような時間配分、教育内容の厳選、言葉の選び方、デモンストレーションの方法となった資料である。
5. 酸素療法に関する講義・演習資料	2014年7月	基礎看護技術Ⅱの科目で使用する講義資料および演習資料を作成した。この項目は解剖学・生理学の知識が特に必要となる単元であるため、知識の確認に重点を置いた。また、心理社会面についても学生が考えられるように工夫して作成した。
6. 食事の援助・口腔ケアに関する講義・演習資料	2014年12月	基礎看護技術Ⅰの科目で使用する講義資料および演習資料を作成した。この項目は、日常生活の中でも身近な食生活および歯磨き等に関する内容である。そのため、健康な学生が病院で入院してる患者の食生活について考えることができるよう、身近な事例などを用いて説明した資料である。
7. 看護過程の事例のデータベース展開および関連図	2013年8月	看護過程の演習で使用する事例のデータベース展開および関連図作成を行った。この科目では、学生が初めて看護過程を展開するのだが、そのグループワークで使用する事例の、いわば見本のようなものを作成した。そのため、次に3年生にあがる学生ではあるが、2年生の現在でわかりやすい用語を使用する、説明を丁寧にするなどの工夫をした。
8. 電法の講義資料、演習資料	2013年6月	基礎看護技術Ⅱの科目で使用する講義資料および演習資料を作成した。この項目は、基礎看護技術Ⅱの最後の項目であったことから、基礎看護技術Ⅰ、Ⅱおよび生理学や解剖学の知識を確認しながら授業を受けられるよう、資料を作成した。
9. 排泄の援助に関する講義資料	2013年12月	基礎看護技術Ⅰの科目で使用する講義資料を作成した。この科目は1年生を対象にしていることから、1年生が要点を分かりやすく、簡潔に説明することに重点を置き、

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
10. 排泄の援助に関する演習資料	2012年11月	講義ではパワーポイントにて説明を追加した。この資料は、2年時の基礎看護技術Ⅱでも復習資料として使用される。 基礎看護技術Ⅰの科目で使用する演習資料を作成した。この項目は、基礎看護技術Ⅰの最後の項目であったことから、排泄の演習に関する内容だけでなく、今まで学んだ内容を思い出しながら実施できるよう、復習箇所を明確にしたものを作成した。学生は、この演習資料を実習先へ持参し、自己学習に活用している。
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. 学生授業アンケート高評価による表彰	2015年7月13日	前任校で担当した「基礎看護技術Ⅲ」の授業アンケートが高評価であったことから、学部長より表彰を受け、FD委員会より賞金（研究費）を得た。
<b>4 その他</b>		
1. 一般入試の問題作成	2013年4月から2014年3月	一般入試の生物の問題作成を行った。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 養護教諭二種免許状	2011年5月15日～現在	
2. 看護師免許	2004年4月8日～現在	
3. 保健師免許	2004年4月8日～現在	
4. 精神保健福祉士免許	2004年4月23日～現在	
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
1. オープンキャンパス運営補助	2017年4月1日～現在	広報入試委員として、オープンキャンパスの運営にかかわる業務を行っている。会場設営、学生スタッフや担当教員の対応、急病人などの介抱、その他質問などへの対応などを行っている。
2. オープンキャンパスでの実習室企画の運営	2016年4月1日～現在	オープンキャンパス時に基礎看護学実習室で実施している、学生同士の血圧測定やシミュレーションモデル（シムマン）の稼動などを行い、受験生対応を行っている。看護の基礎的な部分に興味を持ってもらえるよう、平易な言葉でわかりやすく説明することを心がけている。
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
<b>2 学位論文</b>				
1. 移動援助動作時の腰部負担評価を目的としたアセスメントツール（TAMAツール）の開発	単	2012年3月	大阪大学	本研究では、上方移動援助での看護師の腰部負担を評価できるツールの開発およびその信頼性と妥当性を検証した。移動援助動作に関する18項目からなる「移動援助動作アセスメントツール（TAMAツール）」を作成した。妥当性の検証では、14名の看護師が行う上方移動援助動作より、腰部椎間板圧迫力（Fc）等を算出した。ツールの総合得点はFcの最大値・平均値と相関があった。信頼性の検証は、看護師のそばで採点する直接目視法と撮影された映像で採点する映像視聴法の2種類にて行った。直接目視法では信頼性が確認できたが、映像視聴法ではできなかった。以上より、TAMAツールは妥当性及び直接目視法における信頼性が確認された。
2. 移動援助時のベッドの高さの違いが患者に及ぼす影響について	単	2009年3月	大阪大学	移動援助が患者の身体負担に及ぼす影響、および看護師の作業効率の違いを検証した。高齢女性14名に対し、76cmと51cmの高さのベッドで移動援助を実施し、胸鎖乳突筋筋電図、心電図、頸部・体幹角度、援助所要時間を測定した。76cmのベッドでの援助時に比べ、51cmでは看護師の援助所要時間延長、体幹角度拡大より作業効率低下がみられた。また、被験者の頸部後屈角度、胸鎖乳突筋筋電図積分値も有意に大きく、患者の負担増大が示唆された。以上より、ベッドの高さ調節は看護師の作業効率をあげ、患者の負担を減少させると言える。
<b>3 学術論文</b>				
1. TAMAツール得点から見た療養病棟に勤務する看護師の腰痛の頻度・	共	2018年9月	Health and Behavior Sciences, 17(1), 7-14	The aim of this study was to assess the relationship between the frequency and continuance of

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
持続と腰部負担との関係（査読付）				low back pain (LBP) and low back loads during patient transfer in nurses working at convalescent wards. 32 female nurses participated in this study. The movement of repositioning patients in bed carried out by nurses were scored using the transferring art movement assessment (TAMA) tool. Also, LBP existence (yes / no), frequency (at least once a day / many times a day), continuance (disappeared during the day / continued into the next day) were collected. The researcher observed the repositioning performed by nurses at the bedside. The TAMA tool scores were compared between the two groups of frequency and continuance, using the non-paired t test. We analyzed 292 transfers. The environment score of TAMA tool, of the "LBP many times a day" were significantly lower ( $p < 0.05$ ), though the total score indicating the smallness of low back loads were significantly higher ( $p < 0.01$ ) than that of "LBP at least once a day". The environment score, posture stability score, movement efficiency score, and the total score of "LBP continued into the next day" were significantly higher (all $p < 0.01$ ) than those of "LBP disappeared during the day". Also, "serious LBP" group's total score, posture stability score, movement efficiency score were significantly higher, and the environment score was significantly lower than the others (all $p < 0.01$ ).
2. 着色したベッド柵が認知症高齢者の動作に与える影響（査読付）	共	2018年7月	日本健康医学会雑誌, 27 (2), 137-143	認知症患者の転倒を予防する病室環境を検討する目的で、色彩に着目した。基礎研究で視認性が高いことが確認されたピンク色のベッド柵（着色群）と、通常のベッド柵（通常群）を使用した時の姿勢の違いを、認知症で入院している高齢者10名を被験者として検討した。その結果、通常群より着色群の方が、歩行時と着座第2相時の頸部の屈曲角度が有意に小さいことが明らかになった。 （本多容子、田丸朋子、米澤知恵、岩佐美香、笹谷真由美、河原史倫）
3. ファウラー位での口腔ケアのための開口が高齢者に及ぼす影響（査読付）	共	2018年11月	日本健康医学会雑誌, 27 (3) , 259-265	本研究では、ファウラー位にて開口した場合と開口しない場合において、高齢者の身体にどのような影響が見られるか検証した。11名の女性高齢者に、ファウラー位にて開口した場合と開口しない場合の実験を行い、血圧、脈拍、心拍変動を測定し、比較検討した。その結果、収縮期血圧において、開口した場合において、ファウラー位のほうが実験前仰臥位よりも有意に上昇していた。 （米澤知恵、本多容子、田丸朋子、岩佐由美、河原史倫）
4. 衣生活の援助の講義前後における看護学生の衣服に対する意識の変化（査読付）	共	2017年8月	看護教育研究会誌, 9 (1), pp21-38	研究は、基礎看護技術の衣生活の援助の講義前後の看護学生の衣服に対する意識を明らかにすることを目的とする。講義によりどのように看護学生の意識が変容したのかを把握し、今後の講義内容を検討するための示唆を得ることとした。 2014年度および2015年度の基礎看護技術「衣生活の援助」の講義を受講した1年次生178名が講義前後に記載したコメント用紙を研究対象とした。衣服の選択基準と衣服の意義について記載されている文節を抽出しコード化した。そして意味内容から類似性を検討しカテゴリー化した。 結果、授業前は、身体の機能性を保つ、自己表現する、社会生活を円滑に送るの3つのカテゴリーが抽出された。授業後は、身体の清潔を保持する、身体の機能性を保つ、対象者が自己表現する、対象者に安全安楽を提供する、対象者の社会的役割に合わせるの5つのカテゴリーが抽出された。授業前、看護学生は、衣服は自己表現のツールであることや社会的意義があることを理解していた。授業後には、それらに加え、対象者の立場に立った視点で衣服の選択基準や意義を捉えることができていた。 （中山由美、田丸朋子、森嶋道子、竹中泉）
5. 移動援助動作アセスメント（TAMA）ツールを用いた看護師の腰部負担の評価—療養病棟での患者上方移動援助時における腰部負担および援助環境について—（査読付）	共	2017年5月	日本看護技術学会誌, 16 (1), pp. 21-27	療養病棟での上方移動援助における看護師の腰部負担の実態および援助環境との関係を、移動援助動作アセスメントツール（TAMAツール）を用いて調査した。187例の上方移動援助におけるTAMAツールの総合点（腰部負担）を求め、「環境の整備」に関する項目（援助環境の様子）との関係を分析した。環境の整備に関する7項目のうち、援助環境がよい項目のな

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
6. 高齢者に対する足浴は有酸素運動となるか（査読付）	共	2017年3月1日	武庫川女子大学看護学ジャーナル, 2, pp. 75-81	<p>かで最も多かったのは「援助の人数」の63.1%であり、補助具を使用した例が1.6%と最も少なかった。重回帰分析では「援助の人数」の偏重回帰係数が1.61と最も高く、ついで「ベッドの高さ」が1.22であった。このことから、看護師は整備されていない環境で援助することが多い実態が明らかとなった。また、複数で援助を行いやすく、ベッドを適切に調節しやすい援助環境を整えることが、看護師の移動援助による腰部負担を減らすことにつながるといえる。 （田丸朋子、阿曾洋子、本多容子、伊部亜希）</p> <p>本研究の目的は足浴が膝関節などの運動器に負担をかけない有酸素運動になるか検討することである。高齢者29名（平均73.2歳）を対象に、足浴を30分間行った。脈拍数、前額部および両下肢皮膚温の測定、主観的な運動感の評価の分析を行った。結果、40%の運動強度となる脈拍数になった者はいなかったが、主観的評価では「運動した感じ」の変化に有意差があった。足浴が有酸素運動になるかの指標として脈拍数ではなく、酸素消費量等の観点からの検討が必要と考えられた。 （新田紀枝、本多容子、片山恵、田丸朋子、木村静、伊部亜希）</p>
7. ベッド柵の色の違いが高齢者の視覚認知・着座動作に与える影響（査読付）	共	2016年7月	日本健康医学会雑誌, 25(2)、pp. 135-140	<p>高齢者に対する新しい転倒予防策を検討する基礎データを取得するため、色彩環境に着目した。健康成人に高齢者体験スーツと視覚体験ゴーグルを着用させ、3種類のベッド柵を装着したベッドへの着座時の、主観と動作を測定した。ベッド柵の色は、桃色と緑色、そして通常とした。動作解析は、着座動作第2相で、最大前傾姿勢時の頸部と腰部の屈曲角度を測定した。結果、通常群よりも桃色群の方が視認性が高いことが明らかになった。また桃色群は、着座第2相時の頸部屈曲角度が通常群より小さいことが明らかになった。これらの事から、ベッド柵に桃色の着色を施すと、視認性が向上するため、ベッドの位置関係の確認が容易となり、姿勢の改善につながると考えられる。姿勢の改善は、バランスの改善や頸部負担を軽減させると推測されるため、転倒予防につながる可能性が示唆された。 （本多容子、田丸朋子、笹谷真由美、湯浅美香）</p>
8. 入院中の高齢者に対する継続的な足浴が下肢筋力および足関節柔軟性に与える影響—高齢者の転倒予防をめざしたケアの検討—（査読付）	共	2016年3月	Health and Behavior Sciences, 14(2)、pp. 85-92	<p>入院中の高齢者17名をA・Bの2群に分け、週2回の足浴期間、ウォッシュアウト期間、コントロール期間を各6週間設けたクロスオーバー試験を行い、各介入前後に足指力と足関節背屈角度を測定した。足指力は、先に足浴を実施したA群で足浴介入期間終了時に左右両足とも有意に増加し、足関節背屈角度はA・B群ともに足浴介入期間終了後に有意に増加した。A・B群を合わせ、足指力と足関節背屈角度を足浴介入期間とコントロール期間に分けて比較した結果、足浴介入期間では終了後に左右両足とも足指力が有意に増加し、足関節背屈角度が有意に増加していた。入院中の高齢者に対する継続的な足浴は、転倒を予防する効果があると考えられた。 （本多容子、阿曾洋子、田丸朋子、伊部亜希、片山恵）</p>
9. 看護学部生のリメディアル教育への出席回数のがいが理科系科目の成績におよぼす影響について（査読付）	共	2016年3月	摂南大学看護学研究, Vol. 4, pp. 20-28	<p>看護学生のリメディアル教育への出席回数の違いにより生物・化学の到達度試験点数および「生物・化学の基礎」、「薬理学総論」の科目成績に違いがあるかを検証した。対象は当学部2013年度入学生とした。到達度試験と「生物・化学の基礎」は出席回数が平均以上の学生の点が有意に高かった（<math>p &lt; 0.01</math>、<math>p &lt; 0.05</math>）。「薬理学総論」も同様の傾向であったが、有意差はなかった。出席回数が平均以上の学生の群には「苦手」の学生が多く含まれていたが、「苦手」の学生が少ない、出席回数平均以下の学生の群の成績を上回ることができた。 （田丸朋子、小堀栄子、後閑容子）</p>
10. 看護師のメタ認知的スキルの獲得を促す院内教育に関する文献検討（査読付）	共	2015年3月	摂南大学看護学研究, Vol. 3, pp. 16-23	<p>我が国の院内教育における、看護師のメタ認知的スキルの獲得を促す支援の現状について、文献検討を行った。メタ認知的スキルの獲得を促す支援に関する25文献を抽出した。看護師のメタ認知的スキルの獲得を促す支援として、【日々の看護を実践するために必要な基本的知識・技術・態度】、【看護観】、【自己理解】、【倫理】、【教育者としての能力】に対する院内教育が行われており、シミュレーションや模擬体験、看護体験の語り、事例検討や看護研究の手法による問題解決、研修の企画運営などの方法が取られていた。 （岡田純子、森木ゆう子、中山由美、田丸朋子、坂井利衣、田中結華）</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
11. 看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育に関する文献検討(査読付)	共	2015年3月	摂南大学看護学研究、Vol. 3、pp. 9-15	フィジカルアセスメント教育の現状について、文献検討を行った。フィジカルアセスメント教育の現状について述べている13文献を検討した結果、実践した授業の評価や、臨床看護師のフィジカルイグザミネーション技術の実践実態の評価を把握することで、看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育の課題が明らかになった。限られた時間内での効果的なフィジカルアセスメント教育の実現に向け、教育項目・方法の洗練や、実習施設における臨床看護師のフィジカルアセスメントの実態調査が必要である。 (森木 ゆう子、岡田 純子、中山 由美、田丸 朋子、坂井 利衣、田中 結華)
12. ベッドの高さ別に見た患者上方移動援助時の横シート使用が看護師の腰部負担に与える影響(査読付)	共	2013年3月	看護人間工学研究誌、Vol. 13、pp. 11-8、看護人間工学会	上方移動時の横シート使用が看護師の腰部に与える影響を、ベッドの高さ別に腰部椎間板圧迫力 (Fc) を用いて検証した。看護師8名が、適切および不適切な高さのベッドで横シート使用あり・なしの上方移動を実施した。適切な高さでは、横シートあり時の平均・最大Fcが、横シートなし時に比べて有意に小さかった。しかし、不適切な高さでは、横シートの有無によるFcの差はなかった。以上より、横シート使用は適切な高さのベッドの場合のみ腰部負担を軽減させると言える。 (田丸朋子、本多容子、阿曾洋子、伊部亜希)
13. 移動援助動作時の腰部負担評価を目的としたアセスメントツール (TAMAツール) の開発—上方移動版における妥当性と信頼性の検証—(査読付)	共	2012年3月	Health and Behavior Sciences、Vol. 10、no. 2、pp. 81-91、日本健康行動科学学会	上方移動における看護師の腰部負担評価が行えるツールの開発、および信頼性と妥当性の検証を行った。妥当性の検証では、14名の看護師が行った上方移動援助より腰部椎間板圧迫力 (Fc) を算出した。ツールの総合得点はFcの最大値・平均値と有意な相関がみられた。信頼性の検証では、5名の採点者で19パターン <sup>1)</sup> の上方移動を採点した。採点者内・採点者間信頼性の双方で、ICCが全て0.70以上であった。以上より本ツールの妥当性、信頼性が確認された。 (田丸朋子、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、新田紀枝、片山恵、山本美輪)
14. 「特定高齢者」対象の『転倒予防教室』における運動前の足浴の転倒リスク軽減効果の検証(査読付)	共	2012年12月	日本看護研究学会雑誌、Vol. 35、No. 5、pp. 137-144、日本看護研究学会	高齢者に対する運動前の定期的な足浴が、握力に与える影響を検証した。入院中の高齢者に対し、6週間にわたって週2回の足浴を運動前に実施する足浴群と、実施しない対照群を設定し、6週間の前後で手の握力を測定し、比較した。足浴群と対照群の足浴前の握力に差はなかった。足浴群では、右手の握力が有意に増加し、左手も増加していた。対照群では両手とも握力が低下していた。 (本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、片山恵、田丸朋子)
15. Effects of Foot Bathing on Exercise Capacity in a Fall Prevention Program for the Elderly (査読付)	共	2011年7月	日本健康医学会雑誌、Vol. 20、No. 2、pp. 65-72	足浴の運動能力向上における効果の検討のため、特定高齢者対象の転倒予防教室にて足浴介入研究を行った。運動前に足浴を行う足浴群 (15名) と行わない対照群 (10名) を設置し、体力測定の結果を前後比較した。長座位体前屈、開眼片足立ち、TUGおよび握力では、足浴群のみが有意に改善していた。右足の最大一步幅は両群とも有意に改善していた。10m歩行と左足の最大一步幅は両群とも改善していなかった。以上より、足浴群の方が運動能力が向上したと言える。 (本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、片山恵、田丸朋子)
16. The Relationship between the Nurses' Low Back Load and the Height of the Bed during Patient Transfer(査読付)	共	2011年11月	人間工学、Vol. 47、No. 5、pp. 217-221、日本人間工学会	上方移動援助時における看護師の腰部椎間板圧迫力 (Fc) に対するベッドの高さ調節の有無が及ぼす影響について検証した。12名の被験者が、ベッドの高さ調節ありの場合となしの場合それぞれで上方移動援助を行った。ベッドの高さ調節ありの場合のFcは、高さ調節なしの場合よりも有意に小さかった。また、ベッドの高さとFcとの間には負の相関がみられた。すなわち、移動援助時にベッドの高さを調節することは、腰部への負担を減らすことにつながるという。 (田丸朋子、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、荒岡広子)
17. 腹臥位への体位変換が便秘症の糖尿病患者にもたらす排便促進効果(査読付)	共	2011年1月	日本健康医学会雑誌、Vol. 19、No. 4、pp. 186-194	便秘症の患者に対して、腹臥位の施行による排便促進効果を検証した。実験群12名と対照群9名の被験者に対し、拭く臥位前後の腸音パワー値を比較する実験1と、継続的な腹臥位施行軍対照群との排便回数を比較する実験2を行った。実験1では、実験前に比べて実験後の腸音パワー値が有意に大きく、腹臥位施行による腸蠕動運動の促進が確認された。実験2では、腹臥位施行前・施行中および実験群・対照群の排便回数の比較双方において、実験群の方が有意に多かった。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
18. ケアハウス入居高齢者に対する足浴が歩行に与える影響の検討—転倒予防の観点から— (査読付)	共	2010年8月	日本健康医学会雑誌、Vol. 19、No. 2、pp. 70-75	(片山恵、阿曾洋子、伊部亜希、鈴木みゆき、徳重あつ子、本多容子、田丸朋子) 足浴の継続的実施が歩行に与える影響を検証することを目的に、ケアハウス入居高齢者に対し、1週間で3回の足浴を行う実験を行った。その結果、足浴の回数を経るごとに足指部の荷重最大値および歩幅に有意な増加傾向が見られた。また、足指部荷重最大値と歩幅には中等度の有意な相関がみられた。つまり、足浴によって歩行がスムーズになったことで足指部の荷重最大値が増加したと考えられ、転倒予防を目指すケアとしても活用できると言える。 (本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、田丸朋子、片山恵)
19. 皮膚血液循環評価装置の開発とその臨床応用 (査読付)		2010年4月	バイオメカニズム学会誌、Vol. 34、No. 2、pp. 132-14	褥瘡の早期発生子測のため、非侵襲的な血液循環評価装置を試作開発した。局所皮膚領域性耐熱移動モデルを構築し、それを数値解析することにより皮膚の熱伝導率を推定する手法を開発した。実証実験により、温度伝導率と血液量との間に線形相関があることを明らかにした。また、温度伝導率は褥瘡発生子リスク要因とも関連性があることがわかった。 (羽賀知行、伊部亜希、阿曾洋子、宮嶋正子、石澤美保子、高田幸恵、田丸朋子、本多容子)
20. 在宅高齢女性に対する「転倒予防ケア」としての足浴の有効性の検討 (査読付)	共	2010年12月	日本看護研究学会雑誌、Vol. 33、No. 5、pp. 55-63	転倒予防ケアとしての足浴の有効性を検証した。20名の高齢女性に対し、座位での足浴を実施した場合としなかった場合での足関節背屈角度と測定荷重最大値を比較した。足浴後の背屈角度および足趾部荷重最大値の有意な増加がみられた。また、実験前の背屈角度は転倒経験のあるものが有意に小さかったが、足浴後にはその差がなくなっていた。すなわち、足浴の温熱効果で背屈角度が拡大、歩行しやすくなったと考えられる。 (本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、田丸朋子、木村静、徳重あつ子、鈴木みゆき、細見明代)
21. 移動援助時におけるベッドの高さの違いが患者に及ぼす影響について—頸部後屈角度・心拍数の観点から— (査読付)	共	2010年12月	日本看護研究学会雑誌、Vol. 33、No. 5、pp. 25-32	ベッドの高さの違いが、患者の頸部後屈角度と心拍数に与える影響を検証した。健康高齢女性19名は、看護師の腰部負担の少ない高さ、大きい高さのベッドで移動援助を受けた。最大頸部後屈角度は看護師の腰部負担の少ない高さに比べ、腰部負担の大きい高さでの援助時の値が有意に大きかった。心拍数は移動前・移動中・移動後のどの区間も有意差はなかった。しかし腰部負担の大きい高さのベッドでのみ、移動前の値と移動中の値との間に有意な増加が見られた。 (田丸朋子、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、木村静、鈴木みゆき、徳重あつ子、細見明代)
22. ベッドの高さの違いからみた移動援助時の患者の頸部筋負担及び看護師の作業効率への影響 (査読付)	共	2010年1月	人間工学、Vol. 46、No. 1、pp. 10-1	移動援助時の患者の頸部筋負担および看護師の作業効率が、ベッドの高さの違いにどのように影響されるのかを検証した。1名の看護師役が被験者(患者役)に対し、移動援助を易作業高および不易作業高の高さにて実施した。ベッドの高さ間で、患者役の頸部の積分筋電図、最大脊柱挙上角度、頸部後屈角度、援助の所要時間に有意差が見られた。これは不易作業高での援助で看護師の作業効率の低下が起り、患者の頸部筋負担を増加させたためと考えられる。 (田丸朋子、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、徳重あつ子、木村静、鈴木みゆき)
23. 褥瘡発生子測指標開発の基礎研究—皮膚組織温度伝導率と皮膚表在血流との関係— (査読付)	共	2009年9月	日本褥瘡学会誌Vol. 11、No. 4、pp. 510-519	健康高齢者の温度伝導率と皮膚血流量との関係を検討した。皮膚表面温度応答は、通常時よりも血流増加時の方が冷却刺激終了後の温度上昇の傾きが大きい傾向が見られた。温度伝導率は、通常時よりも血流増加時で有意な上昇がみられた。通常時と血流増加時の温度伝導率を従属変数、通常時と血流増加時の皮膚血流量を独立変数とした回帰分析で線形関係がみられた。温度伝導率の変化率を従属変数、皮膚血流量の変化率を独立変数とした回帰分析でも線形関係がみられた。 (伊部亜希、阿曾洋子、羽賀知行、田丸朋子、本多容子)
<b>その他</b>				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 上方移動援助時におけるスライディングシートの有無による患者移動時間・腰部椎間板圧迫力の違い	共	2018年8月	日本看護研究学会 第44回学術集会	(田丸朋子、本多容子、山口晴美、谷口千夏、阿曾洋子)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
2. ベッド柵の色の違いが健康高齢者の注視時間に与える影響	共	2018年8月	日本看護研究学会 第44回学術集会	(本多容子、 <u>田丸朋子</u> 、笹谷真由美、岩佐美香、米澤知恵、河原史倫)
3. 主観的指標による全身浴と手浴が及ぼすリラクゼーション作用の検証	共	2018年3月	第31回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会	(山口晴美、 <u>田丸朋子</u> 、片山恵、岩崎幸恵、清水佐知子、阿曾洋子)
4. 上方移動援助時におけるベッドの高さと看護師の腰部負担との関係—TAMAツールを用いた分析—	共	2017年8月	日本看護研究学会 第43回学術集会	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、本多容子、片山恵、山口晴美)
5. 療養病棟の看護師が実施している上方移動援助時の腰部負担	共	2017年12月	第37回日本看護科学学会学術集会、012-2	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、本多容子)
6. 療養病棟に勤務する看護師の腰痛発生状況と移動援助時の腰部負担との関係	共	2017年11月	第25回看護人間工学部会 研究発表会 プログラム・抄録集、p20	( <u>田丸朋子</u> 、本多容子、阿曾洋子)
7. 患者移動援助時の腰部負担と看護師の腰痛との関係—移動援助動作アセスメントツール (TAMAツール) を用いた分析—	共	2016年6月	日本人間工学会第57回大会、pp.158-159	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、伊部 亜希、本多容子)
8. The influence on exam results of scientific subjects when participation frequency differs in remedial education for nursing students	共	2016年3月	The 19th East Asian Forum of Nursing Scholars, p.60	(Tomoko Tamaru, Eiko Kobori, Yoko Gokan)
9. 「衣生活の援助」の講義後の看護学生の学び—衣服の役割と選択基準について—	共	2016年12月	第36回日本看護科学学会学術集会、PB-5-22	( <u>田丸朋子</u> 、中山 由美、森嶋 道子、竹中 泉)
10. 「衣生活の援助」講義前の看護学生が考える衣服の役割と選択基準	共	2016年12月	第36回日本看護科学学会学術集会、PB-5-21	(竹中 泉、森嶋 道子、中山 由美、 <u>田丸朋子</u> )
11. アウトプット型研修による知識定着の効果 胸痛を主訴とする救急初期対応の研修を通して	共	2015年8月	第17回日本救急看護学会学術集会	(木原 智枝子、石川 由美、小土橋 美希、森木 ゆう子、 <u>田丸朋子</u> )
12. 色彩を用いた高齢者の転倒予防策の有効性の検討 高齢者体験スーツ着用時の着座動作の検討	共	2015年7月	日本看護研究学会 第41回学術集会	(本多容子、 <u>田丸朋子</u> 、湯浅 美香、井村 弥生、伊井 みづ穂)
13. 看護師2名で行う水平移動援助動作における安定性・効率性・腰部負担の検証 低いベッドでの移動援助における腰部負担との関係	共	2014年9月	第22回 看護人間工学部会総会・研究発表会	( <u>田丸朋子</u> 、本多容子、富澤 理恵、谷川 茜)
14. 学生が行う患者水平移動援助における腰部負担について 1人で行う場合と2人で行う場合での比較	共	2014年8月	日本看護研究学会 第40回学術集会	( <u>田丸朋子</u> 、本多容子、富澤 理恵)
15. 臨床で行われる移動援助における看護師の腰部負担の実態調査	共	2013年9月	第20回看護人間工学部会 研究発表会 プログラム・抄録集	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、荒岡 広子)
16. 療養病棟での患者上方移動援助時における看護師の腰部負担および援助環境の評価—TAMAツールを用いて—	共	2013年8月	日本看護研究学会雑誌、Vol.36、No.3、pp.147、日本看護研究学会	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、)
17. 移動援助動作アセスメントツール得点からみた上方移動援助の実態～看護師の属性との関連～	共	2013年3月	日本看護研究学会第26回近畿・北陸地方会学術集会抄録集、pp.60	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、)
18. 入院中の高齢者に対する運動前の定期的な足浴が手の握力に与える影響	共	2013年12月	日本看護科学学会第32回学術集会抄録集、pp.212	(本多容子、伊部亜希、 <u>田丸朋子</u> 、山本美輪、阿曾洋子)
19. 入院患者に対する定期的な足浴が足部に与える影響 ～足指力の検討～	共	2012年3月	看護人間工学研究誌、Vol.12、pp.5	(本多容子、信岡研身、伊部亜希、 <u>田丸朋子</u> 、山本美輪、荒岡広子、阿曾洋子)
20. 駆血後上肢挙上による静脈怒張促進の試み	共	2012年3月	看護人間工学研究誌、Vol.12、pp.59	(荒岡広子、伊部亜希、本多容子、 <u>田丸朋子</u> 、假谷ゆかり、阿曾洋子)
21. 肘正中皮静脈怒張における駆血と駆血後上肢挙上との比較検討	共	2012年3月	日本看護研究学会第25回近畿・北陸地方会学術集会、pp.2	(荒岡広子、伊部亜希、本多容子、 <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子)
22. 入院高齢者の握力および足指力の3ヶ月間の変化の検証	共	2012年3月	日本看護研究学会第25回近畿・北陸地方会学術集会、pp.29	(本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、 <u>田丸朋子</u> 、荒岡広子)
23. 車椅子移乗援助時におけるベッドの高さの違いが動作の効率性・安定性に与える影響～看護師の重心の動きから～	共	2011年3月	看護人間工学研究誌、Vol.11、pp.5	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、片山恵、假谷ゆかり、荒岡広子)
24. ケアハウス入居高齢者に対する足浴が歩行周期に与える影響	共	2011年3月	看護人間工学研究誌、Vol.11、pp.58	(本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、 <u>田丸朋子</u> 、片山恵、假谷ゆかり、荒岡広子)
25. 上方移動援助動作アセスメントツールの腰部負担評価としての妥当	共	2011年12月	日本看護科学学会第31回学術集会抄録集、pp.	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、片山恵)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
性の検証			215	
26. ケアハウス入居高齢者に対する足浴の転倒予防効果(第1報) 足浴間隔の観点から	共	2010年7月	日本看護研究学会雑誌、Vol. 33、No. 3、pp. 176	(本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、 <u>田丸朋子</u> 、假谷ゆかり)
27. 男性高齢者に対する「転倒予防ケア」としての足浴の有効性の検討	共	2009年9月	日本老年看護学会第14回学術集会抄録集、pp. 239	(本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、 <u>田丸朋子</u> 、木村静、徳重あつ子、岡みゆき)
28. 移動援助時のベッドの高さの違いが患者に及ぼす影響について 頸部後屈角度・心拍変動の観点から	共	2009年7月	日本看護研究学会雑誌、Vol. 32、No. 3、pp. 178	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、伊部亜希、本多容子、木村静、徳重あつ子、岡みゆき)
29. 女性高齢者に対する「転倒予防ケア」としての足浴の有効性の検討ー足部指標の観点からー	共	2009年7月	日本看護研究学会雑誌、Vol. 32、No. 3、pp. 226	(本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、 <u>田丸朋子</u> 、木村静、徳重あつ子、岡みゆき)
30. 移動援助時の看護師の作業効率の違いが患者に及ぼす影響について	共	2009年3月	看護人間工学研究誌、Vol. 9、pp. 44	( <u>田丸朋子</u> 、阿曾洋子、本多容子、伊部亜希)
31. 女性高齢者の転倒経験からみた「転倒予防ケア」としての足浴の有効性の検討	共	2009年12月	日本看護科学学会誌、Vol. 29、No. 3、pp. 480	(本多容子、阿曾洋子、伊部亜希、 <u>田丸朋子</u> 、假谷ゆかり)
32. 作業姿勢からみた患者移動動作の看護者への腰部負担の違い	共	2008年3月	看護人間工学研究誌、Vol. 8、pp. 50	( <u>田丸朋子</u> 、阪井千裕、本田容子(誤植)、西村千年、阿曾洋子)
33. ベッドの高さの違いによるベッドメイキング動作の分析	共	2004年3月	日本人間工学会第12回システム連合大会	( <u>田丸朋子</u> 、矢野祐美子、阿曾洋子)
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 認知症の高齢者に対する色彩を用いた転倒予防策の検証	共	2016年4月～	日本学術振興会	平成28年度科学研究費（基盤研究C：16K12226） 分担研究者 （代表：本多容子－藍野大学）
2. 移動援助アセスメントツールの腰部椎間板圧迫力値との関係の検証	単	2014年4月～	日本学術振興会	平成26年度科学研究費（若手研究B：26861878） 代表研究者
3. 臨床実践内容に基づく基礎看護技術教育におけるスキンケア技術教育の検討	単	2012年4月～	日本学術振興会	平成24年度科学研究費（基盤研究C：24593230） 分担研究者 （代表：田中結華－摂南大学）
4. 移動援助動作アセスメントツールのベッド上での移動援助における妥当性・信頼性の検証	単	2012年10月～	日本学術振興会	平成24年度科学研究費（研究活動スタート支援：24890276） 代表研究者

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2016年4月～現在	日本看護技術学会 会員
2. 2011年1月～現在	日本健康行動科学学会
3. 2010年7月～現在	日本看護科学学会
4. 2010年7月～現在	日本健康医学会
5. 2010年5月～現在	日本老年看護学会
6. 2009年6月～現在	日本人間工学会
7. 2009年2月～現在	日本褥瘡学会
8. 2008年11月～現在	日本看護研究学会
9. 2007年6月～現在	日本人間工学会 看護人間工学部会